

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：11501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06058

研究課題名(和文) 奥浄瑠璃の表現形成と展開に関する基礎的研究 東北地方における中世文芸の享受と創造

研究課題名(英文) Basic study on expression of the "Okujorui": Reading and reproduction of the Japanese medieval literature in the Tohoku region

研究代表者

宮腰 直人 (Miyakoshi, Naoto)

山形大学・人文学部・准教授

研究者番号：50759157

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近世後期から明治期を中心に東北地方で書写された奥浄瑠璃諸作の表現分析を通して、当該地域の中世文芸の享受とそれを基盤とする創造の諸相を明らかにすることを目的とした。本研究の主な成果としては、従来、奥浄瑠璃研究の中心であった宮城県域や岩手県域だけではなく、山形県域の奥浄瑠璃に関する史資料を見出したこと、その表現分析を通して、東北における中世文学の享受と再創造の一端を明らかにした点があげられる。

また、本研究では、従来の先行文芸との比較を中心とする分析手法をふまえつつ、さらに奥浄瑠璃の研究の新たな可能性として、奥浄瑠璃テキスト間の影響関係を重視した表現分析の方法を提案した。

研究成果の概要(英文)："Okujorui" is the oral literature of the Tohoku region from early modern times to modern times. I analyze the expression of the "Okujorui", and a purpose of this study is to clarify reading of the Japanese medieval literature in the Tohoku region and the state of the reproduction of the literature.

Result of this study is to have found a document of the "Okujorui" of not only the Miyagi area and the Iwate area that were the center of the study of the "Okujorui" but also Yamagata area. In addition, I analyzed expression of a document of the "Okujorui" and clarified an example of concrete reading of the Japanese medieval literature in Tohoku and the reproduction of the literature.

In addition, in this study, I suggested the method of the expression analysis that made much of influence relations between "Okujorui" text.

研究分野：日本文学

キーワード：日本文学 奥浄瑠璃 語り物

1. 研究開始当初の背景

奥浄瑠璃とは、東北の地域社会に根差した語り物文芸の担い手とその曲目および写本群をいう。松尾芭蕉『奥の細道』にいち早く言及され、伊達藩と南部藩を中心に伝承されてきた語り物文芸の一つである。書写は近代に入っても続き、明治期にも多くの伝本が認められる。現在確認できるだけでも、少なくとも82作品以上が伝存し、諸伝本は190本以上に及ぶ。

これまで奥浄瑠璃は、東北の郷土資料としての意義が論じられ、主に民俗学と芸能史の研究の対象となってきた。民俗学の立場からは担い手である盲僧と東北における語り物文芸形成の密接なかかわりが注目されてきた。その一方で芸能史からは、近松門左衛門登場以前の、いわゆる古浄瑠璃・金平浄瑠璃との連続性および地域的展開が問題視されてきた。小倉博による先駆的な資料の収集と資料集刊行を端緒に(小倉博編『御国浄瑠璃集』1939年)、以降二冊の資料集(阪口弘之編『奥浄瑠璃集』和泉書院、1994年、福田晃他編『奥浄瑠璃集成』(一)三弥井書店、2000年)も刊行された。近時断続的ながら、新資料の報告が相次ぎ、研究の基盤は固められつつある。ただし、奥浄瑠璃を対象にした総合的研究は少なく(成田守『奥浄瑠璃の研究』桜楓社、1985年)、資料の質量に比して、未だ多くの課題が残されている。

本研究代表者は、幸若舞曲や『曾我物語』といった語り物文芸が地域社会や近世社会で享受され、新たに創造される様相を追究してきた。その際に、研究の指針としてきたのは、既知の資料・研究領域の再検証と資料群の再構築による新たな問題領域の提示である。新資料の発見が研究の進展に寄与することは言うまでもなく、地域資料の場合は、その点に力点が置かれもする。だが、そこに新たな視角から光をあてなければ、それまでの研究蓄積は継承は難しく、その研究の歴史は途絶える恐れがある。

近年の奥浄瑠璃研究の場合、新資料の発掘に重点が置かれ、発掘されたテキストの分析まで至らない点が少ない。古浄瑠璃正本を中心とする先行作との比較検討も、テキスト分析の一手法だが、この研究手法は、基本的に一対一でテキストを比較するため、結論的に先行テキストとの関係に議論が集約され、個別事例の指摘にとどまらざるを得ない面がある。むしろ、個別の事例の積み重ねから明らかになることも少なくないが、奥浄瑠璃総体への理解という点では隔靴搔痒の感があることは否めず、新たな研究視角の模索が望まれているのが現状である。

こうした研究状況を打開するうえで示唆的な研究が、近年、中世文学研究の立場から提出されている(錦仁『浮遊する小野小町』笠間書院、2001年、鈴木彰「薩摩海域の龍宮伝承 中近世移行期における薩摩の文化環境」立教大学日本学研究所年報」12号、

2014年他)いずれも地域資料を対象にして、地域社会における古典文芸の享受と創造に光をあて、文化的環境の解明を念頭において研究を推進している点で共通する。両研究で重要なのは、表現論とその表現に関わって文芸享受の文化環境や、心性の諸相も問題化されている点であろう。

本研究代表者はかかる問題認識に学びつつ、奥浄瑠璃の総合研究の方法を模索するなかで、奥浄瑠璃を地域社会における中世文芸享受と創造という視点から当該文芸を捉えなおす研究視座を着想するに至った。この視座を基軸にして、さらに、表現分析と享受の文化環境や心性の解明をもあわせることで、重層的な奥浄瑠璃研究のあり方を探るべく本研究計画は構想された。

2. 研究の目的

本研究では、近世後期から明治期を中心に東北地方でおびただしく書写された、奥浄瑠璃諸作品の表現分析を通して、当該地域の古典文芸の享受とそれを基盤とする創造の諸相を明らかにすることを目的とした。

本研究では、現時点での奥浄瑠璃諸本の伝本の基礎情報の把握に基づき、お伽草子や語り物文芸との比較を基軸にして、諸作品に共通して多用される詩歌や教化の言説に着目して、奥浄瑠璃諸作品の表現基盤とその創造的展開を解明することを目指した。質量ともに充実した文化資料として奥浄瑠璃を定位することは、自ずと歴史学や民俗学、宗教史との交錯に繋がり、学際的人文学研究の基盤になることが予測される。日本文学や日本文化における奥浄瑠璃の位相を問い直し、東北地方に根差した古典文芸の意義を広く社会に発信することをねらいとする。

3. 研究の方法

(1) 奥浄瑠璃基礎目録の作成

奥浄瑠璃の表現形成を解明するうえで、奥浄瑠璃諸伝本に関する基礎目録の作成が必須となる。奥浄瑠璃の目録としては、すでに「奥浄瑠璃諸本目録」(『奥浄瑠璃集成』(一)三弥井書店、2000年)があるが、近年の研究状況の進展によって増補改訂が必要である。一次資料を所蔵する機関での書誌調査とマイクロフィルムや翻刻論文など二次資料の収集を行い、奥浄瑠璃基礎目録を作成する。

(2) 奥浄瑠璃諸本の表現分析

上記目録の作成と並行して、主な伝本の表現形成とその展開を明らかにする。古浄瑠璃正本・説経正本・舞の本など語り物文芸のテキストとの比較分析を基礎にしつつ、さらに従来の研究で部分的な指摘がある、お伽草子や寺社縁起、説話集といった物語草子も必要に応じて、視野におさめることで、近世東北社会における古典文芸の享受の一環として、奥浄瑠璃諸作品の把握を試みる。

4. 研究成果

(1) 主な研究成果

奥浄瑠璃基礎目録の作成の過程で、学会未紹介の奥浄瑠璃の伝本『羽州最上寺津深山権現

之御本開』を見いだしたことは成果の一つである。同書は『天童市編集資料』28号(1982年)に掲載され、地域資料としては知られていたものである。今回、代表者による本文検証の結果、表現、内容ともに奥浄瑠璃の要素を多分に備えたテキストであることが判明し、研究会で報告をした。本テキストの再発見によって、奥羽地域における奥浄瑠璃の展開を具体的に明らかにすることができた。このことは、当該地域においてさらなるテキストや資料の発掘を十分に予測させ、今後の奥浄瑠璃研究の研究視座の拡張と多元化に益することが期待できる。

また、奥浄瑠璃『天狗の内裏』論を執筆し(後掲雑誌論文)従来、「異本」として捉えられることが多い奥浄瑠璃諸本自体を論じる必要性と、奥浄瑠璃諸本間の連続性を問う視座を提起した。また、奥浄瑠璃と金平浄瑠璃の関わりに注目し、その表現志向と、これまでほとんど取り上げられていない山形県域の古浄瑠璃享受史料を論じた(後掲図書)。こちら学会にはほとんど知られていない史資料を再発見し、より大局的な地域における芸能の展開に位置付けた点に意義がある。上記の成果とともに奥浄瑠璃研究の対象領域を上げた点で、今後の研究の進展に寄与すると考えられる。

(2) 研究成果の位置づけと今後の展望

(1)や(2)で示したごとく、奥浄瑠璃基礎目録の作成から研究を開始したことで、従来ほとんど見過ごされてきた山形県域の奥浄瑠璃の史資料を発見し、研究領域を広げたことは本研究の際だった成果としてあげることができる。基礎目録については引き続き、作成を継続し、種々の調整をはかったのち、公表し、奥浄瑠璃研究の新たな基盤を築くことを目標とする。

また、学会発表や論文執筆についても、留意が整い次第、順次公表することを目指す。

上記の論文執筆公表のほか、現在、本研究代表者の所属先である山形大学の公開講座にて、「東北の義経伝説と奥浄瑠璃『奥の細道』を出発点にして」(後掲学会発表)と題する講義を行い、研究成果の社会還元につとめた。従来、奥浄瑠璃といえば、宮城県域や岩手県域の芸能文化であることが強調されてきたが、それが山形県域にも認められることを近世奥羽の史資料を明らかにし、地域の方々に報告できた点は、本研究の成果の一つとして強調しておきたい。

東北の地域社会における中世文芸享受の具体相の解明についても上記の成果によって、着実に成果をあげ、今後のさらなる研究の進展のための基盤を築くことができた。なお、本研究代表者は、本研究の延長線上に構想した研究計画・基盤研究C「奥浄瑠璃の享受と諸本形成の研究 出羽三山・奥羽地域の芸能環境と書物文化の解明」が幸いにも採択されたため、本研究で構築した研究視座や方法論をさらに深化させる機会を得た。持続的

な研究によって、日本文学研究ならびに奥浄瑠璃研究はもとより、広く人文学研究への寄与を心がけた研究を推進したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

① 宮腰直人、「東北の義経伝説と奥浄瑠璃 奥の細道を出発点として」(「山形の魅力再発見 14、2016年12月、2頁~8頁、査読なし

宮腰直人、牛若の地獄極楽遍歴譚試論『天狗の内裏』の版本系諸本と奥浄瑠璃諸本をめぐって、「立教大学日本文学」、116号、2016年7月、14頁~24頁、査読有

〔学会発表〕(計 3 件)

① 宮腰直人、「17・18世紀の物語草子 とリテラシー研究 — デジタル画像データを手がかりにして —」日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画 研究集会 新たな古典学としてのリテラシー史研究 — 多分野融合による可能性を求めて —、2016年9月10日、東北大学川内南キャンパス

宮腰直人、「東北の義経伝説と奥浄瑠璃『奥の細道』を出発点にして」(山形大学都市・地域学研究所公開講座、2016年9月3日、山形大学小白川キャンパス)

宮腰直人、「奥浄瑠璃の展開と地域社会『羽州最上寺津深山権現之御本開』をめぐって」(さんごの会、2015年9月20日、立教大学池袋キャンパス)

〔図書〕(計 1 件)

小峯和明監修『日本文学の展望を拓く(仮)』笠間書院、2017年刊行予定、宮腰直人「南奥羽地域の古浄瑠璃享受」、印刷中、頁数は未定、査読なし

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮腰 直人 (MIYAKOSHI NAOTO)

山形大学・人文学部・准教授

研究者番号：50759157

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()